



TITLE:

土木の變前後：經濟問題を中心として見た明蒙交渉

AUTHOR(S):

萩原, 淳平

CITATION:

萩原, 淳平. 土木の變前後：經濟問題を中心として見た明蒙交渉. 東洋史研究 1951, 11(3): 193-212

ISSUE DATE:

1951-10-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/138931>

RIGHT:

東洋史研究

第十一卷第三號 昭和廿六年十月發行

土木の變前後

——經濟問題を中心として見た明蒙交渉——

萩原淳平

まえがき

一、北方遊牧地帯におけるオイラート部族

二、オイラートの明に對する經濟的要求

三、明朝とオイラートの外交政策と土木の變

むすび

ま え が き

土木の變といえは明朝にとつては洪武・永樂の創業時代を經過して、まさに安定と繁榮の時期ともいえる中期に入つたところ起つた事件である。この事件で中國皇帝が北族に捕虜となつたことは、明朝一代を通じてもまた中國と北方アジア民族との交渉史上においてもまさに特筆すべきことであつた。

正統十四年七月（一四四九）、エセン（也先）の侵入に始まるこの事變は、直接的にはモンゴル族と明朝との交渉史の一環をなすものであるが、當時の北方地帯は統一勢力の形勢過程にあつたため、北方自體すでに諸勢力の政治的に對立があつて複雑な様相を示していた。この事變に關するかぎりにおいても、明・オイラート（瓦剌）・モンゴル（韃靼）の三者と、その間の政治・軍事・經濟などあらゆる面の分析が行われなければ、問題は理解しがたいであろう。しかし北方自體に關しては、すでに和田清博士の諸研究^①があり、また明蒙交渉に關しても田村實造博士の論文^②が發表されているので、ここでは時代を正統前後（十五世紀半ごろ）に限定し、視點を經濟問題におきながら土木の變を理解し、併せて農耕民族との交渉にあらわれた遊牧民族の性格の一端を考察して見たらと思う。

① 和田清「元良哈三衛に關する研究」

（滿鮮地理歴史研究報告第十二・十三）

・「明代の蒙古」（東亞史論叢）等

② 田村實造「明と蒙古との關係についての一面觀」

（史學雜誌五十二ノ一、二）

一、北方遊牧地帯におけるオイラート

さて順序として土木の變の中心人物であるエセンを出したオイラート部族について簡單にふれてみよう。オイラート族の社會狀態に關しては、すでにウラヂミルツオフの研究がある^①。これによればオイラート族は元代には、いわゆる四トウメン（四万戸）のオイラート人として、他の蒙古部族とは一應別個の待遇を受けていた。したがつて元朝の崩壞にあたつては獨立して覇をとなえるのに有利な立場にあつた。また經濟的地理的にも恵まれていたため、元朝崩壞後モンゴル諸部族、とくに元朝の後裔に對抗しつつ、北方地帯統一者となる條件をも具えてい

た。このオイラト部から明初以來、マアムード（馬哈木）およびその子トカン（脱歡）が出ると、かれらは漸く強盛となつてきた。中でもトカンは、宣徳の末には多年の競争相手である韃靼（モンゴル本族）の和寧王アロタイ（阿魯台）をたおし、正統のはじめにはその餘類のアタイ（阿台）ノルジベ（朶兒只伯）らまで併呑した。なおこれと前後してオイラト部内の競争者である賢義王・安樂王の兩者をもたおし、その部を吸収して武力的統一にも成功した。

さてトカンを受けついだのがエセンであるが、この父子のモンゴリア統一の努力に對し二つの障害があつた。一つはかれらがモンゴル本族のような背景をもっていないことであり、他はその經濟的基盤がまだ貧弱であつたことである。前者はモンゴル全部族の内に培われたいゆるチンギスカンの「黄金の氏族」に對する尊崇の念で、この觀念は抜くことのできない根強さがあつた。たとえばトカンがアロタイの部衆をことごとく收め、さらに賢義安樂二王の衆を兼併して自らカーンになろうとした時、人々はこれをうけ入れなかつた。そこでかれはやむをえず元朝の後裔であるモンゴル部長トブハ（脱々不花）を立ててアロタイの衆を統卒せしめ、自らは隱忍自重しなければならなかつた。^②この様な關係はトカンの子のエセンの時代になつてもつづけられた。エセンがトカンの後をついだころは、オイラトの勢力はある程度強固なものになつてはいたが、北方諸部族を統一していくにはまだ軍事的にも政治的にも勢力を強化する必要があつた。それゆえエセンも「黄金の氏族」に出自するトブハをカーンとして推戴していく方針をとつた。この目的のためにエセンの姉がトブハの妻となるという婚姻政策もとられた。したがつて實質的にはともかく、表面上では常に兩者は相提携していた。實錄によれば、兩者はたえず行を共にしており明朝にとつてはトブハはオイラト・カーンとして記されている。このように明人にとつてはトブハとエセンとは一身同體であるかのように考えられているが、實は兩者の關係は、それほど

圓滿ではなかつたようである。王翊の言にトトブハは奇策多しとあるように、決して凡庸の君主ではなかつたらしい。それゆえかれはエセンのかいらいカーンとしては満足せず、エセンの專横を快しとしなかつたのである。むしろ元朝の後裔たることを意識してエセンを倒す機會をたえずねらつていたと考えられる。

このようなかれらの自尊心は朝鮮に對するかれの勅書に「太祖成吉思皇八方を統馭し、祖禪皇帝（世祖）即位の時には天下は命に順はないものはなかつた。……今われ祖宗の運をうけて即位し己に十年……」（李朝實錄）とみえていることからうかがわれよう。しかし當時のトトブハはその軍事的政治的勢力はエセンに及ばなかつたので心ならずも名目上のカーンに甘んじなければならなかつたようである。ところが正統十一年ころからオイラートの勢力が東方へ擴大し、三衛および滿洲・女眞方面にまで侵入するにおよんで、トトブハはこの機に乘じ、自己の勢力を東方に確立しはじめた。すなわち十三年ごろには、もとの和寧王アロタイの根據地である今のウジユムチン・フルンバイル方面から少くともダヤン衛方面にもトトブハの勢力はしだいに大きくなりつつあつた。さらに三衛女眞方面に關しては明實錄に達子・達賊などとよばれる勢力が大きくなっているが、土木の變當時遼東方面に侵入したトトブハの軍隊を實錄では達賊とよんでゐることから考えれば、この方面の勢力關係も自ら明瞭となる。この政治的軍事的背景をえたトトブハは、當然エセンとの間に對立關係を示しはじめた。エセンの南侵計畫にしばしば反對したのはトトブハであるが、かれは單に明に對して軟論を主張する代表者であつたばかりでなく、進んで明と通じあるいは明の助けをえてエセンを倒しモンゴルの回復を計ろうと意圖したものではなかつたか。土木の變前後のエセンとトトブハの關係は、否泰錄によれば「外親み内忌む」という状態で内面的爭が相當烈しかつたらしい。わずか二三年後の景泰二年には太子の擁立問題に端を發して兩者の間の紛爭が、一時はトトブハの優勢をさえ思わしめながらもけつきよくエセンの勝利に終つた。このようにしておよそ十年間の努力

が報いられてエセンの實力は遂にトトブハの占有する傳統的權威にうち勝つて、エセンは大元田盛可汗として名實共に北方地帯の統一者となりえたのであつた。

以上によつてエセンの全モンゴリアの統一に對してチンギス・カーンの子孫のもつ傳統的權威がいかに大きな障礙をなしたかを述べた。次に北方アジア統一に對する他の弱點、すなわち經濟的基礎の貧弱性という今一つの問題について考えてみたい。この經濟的缺陷は、もちろんエセンの北方地帯統一に對する軍事的政治的行動と密接な關係を有している、ある點では政治的軍事的行動と經濟的要求とが相關々係をもちながらエセンの行動を支配していたともいえる。しかし對明交渉においては、具體的な現象として主として經濟的交渉があげられるが、土木の變もけつきよくこの經濟的交渉の破綻から生じたと考えられる。したがつてエセンの行動も軍事的政治的な面と關聯せしめつつ主として經濟的な面から考察してゆきたい。

明史瓦剌傳によれば、正統四年にトカンが死んでエセンが大師淮王の位をついだ時に北部は皆服屬したとある。この北部の範圍がどこまでであつたかは明らかでないが、だいたいアルタイ山附近か、ハンガイ山南方であろう。とにかくエセンが第一に鋒先を向けたのはハミ（哈密）である。ハミはかつて明の成祖が忠順王を封じて西域の要道をかため諸藩を統領せしめた事があるばかりでなく、古來東西交通要路上の重要地點である。^④とくに遊牧民族にとつては、その經濟的基礎の一つは隊商貿易の形を取つた商業資本によつて中國と西方諸國との間の主な貿易を獨占するか、または他民族たとへば回々人らの商業貿易を保護することによつてうる利得に依存することも多かつた。したがつて交通路すなわち隊商路上の重要地點の確保は、興隆と繁榮を求める者にとつては必要かくべからざるものであつた。この經濟地理的意味と、また一つにはオイラートの本地から近い點からもハミの確保はオイラートにとつて第一に着手すべき政策でもあつた。ハミ確保の企圖はオイラートにあつても、すで

にエセン以前に早くもあらわれており、トカンの時代にも武力による攻撃を行つたり、あるいは結婚政策で懷柔をはかつたりしている。^⑤エセンも附近の部族が服屬するとまずハミ征伐を行つた。とくに正統八年九月から十月ごろにかけては親戚關係にある忠順王の支配下のハミを攻めて王母をとらえている。王母を人質として王を脅かす政策は政治的、とくに經濟的支配權をうるために有利な方法ではあるが、もちろん一回だけの武力的な勝利では支配は完全とはいえなかつた。しかしハミが重要な地點であればあるだけ、あらゆる勢力が集中するので、エセンもたえずハミの支配には努力した。正統十年にも、さらに十三年の夏にも數ヶ月にわたりハミ方面にいてこの地方の經營に努めている。かれはまた赤斤蒙古に對しても正統八年十月には馬匹・酒等を送り結親を求め、九年八月にも同じ努力を重ねている。また沙州に對しても同じところ、同じ様な政策をとつてい^⑥る。

このようにしてハミ方面の重要地點を確保したオイラトは、内部の統一の進むにつれて遊牧民族本來の仲繼貿易としての商業的性格を示してきた。すなわち數多の部族の平定は封鎖的經濟における障壁の打破をもたらし、ハミ方面の經略はこの方面を中心とする重要交通路隊商路の確保をいみし、隊商貿易を容易に促進できるような契機をつくり出したのである。これは戰線を東方へ擴大することと相まつて直接明朝との經濟的交渉を深める原因ともなつてきたと考へられる。

① ウラヂミルツォフ著、外務省調查部譯「蒙古社會制度

史」三〇七頁三四〇頁以下

② 明史韃靼傳

③ 詳しくは和田清「兀良哈三衛に關する研究」(一)(滿鮮

地理歴史報告第十三)三一八頁

④ 明史 西域傳一

⑤⑥ 明史 西域傳二

二 オイラートの明に對する經濟的要求

オイラートと明國との交易については、隊商貿易による交易形態以前に明國のいわゆる朝貢の形式による交易がエセン以前から斷續的ながら行われていたことを述べなければならぬ。たとえばエセンがまだそれほど勢力を得ていなかった正統四年には、モンゴル勢力であるトブハ王の朝貢使にしたがつてエセン自身も來朝しているが、その時の様子とくに朝貢貿易品について正統四年正月の實錄の記載によつてみると

可汗のトブハ王に賜つたものとしては、織金四。爪蟒龍膝襪八。寶衣一。織金胸背麟青紅綵段六。五色段八。絹二十五。金嵌寶石絨氈帽一頂。金釵大鵬壓纓等事件全伽藍香間珊瑚帽珠一串。寶金綵綉紵絲衣六。

金釵纏身蟒龍直領一。青暗花井口對襟曳撒一。織金胸背麟并四寶四季花搭襪比甲各一。織金虎并圈金寶相花雲肩通裾膝襪各一。金相犀角麒麟擊腰一。紅甸皮描金荷包二。減銀摺鐵刀并鞘一。銅線虎尾三。尖雲頭套靴一雙。秋木而烏木裏琵琶一。花梨木火揆思一。鞭鼓喇吧號笛各一。黃身勇字魚肚旗一。魚尾號帶飛虎招旗二。

があげられており、可汗の妃二人には、

紵絲織金獅子虎豹朵雲花細每人八匹。各色絨線蠟胭脂

などを賜わり、そのほか丞相や右丞相のトカン、太子淮王エセンらにもそれぞれ種々の物を賜つた。

これによると非常に多種類の賜品が明の朝廷から北方の貴族たちにおくられている。しかし、これらの賜品は主としてオイラート側の馬あるいは駝・貂鼠等の毛及類および玉石などと交換されたのであるが、オイラートにとつては、このような賜品はオイラート貴族自身の裝飾品奢侈品として多く使用された。^①たとえば土木の變の

後、和議が成立して英宗が北京へ歸る直前のことであるが、エセンが英宗のために宴を開いた時、エセンは妻妾をして英宗に酒を奉らしめると同時に自らも琵琶を弾じており、翌日にはバヤンチムール（伯顔帖木兒）も宴を設けて英宗に饒している。このように宴會が行われる時には食物や服裝はもとより樂器の類にいたるまでいづれも中國式のもので、かれらの豪華な生活もうかがわれる。これらのものはことごとく中國との朝貢貿易によつてえたものであつて、これらの賜品は多くオイラートの貴族階級の奢侈用にあてられたのであらう。したがつて一部をのぞけば純粹の商業貿易の對象としての商品となつたのではなかつたようである。しかしながら朝貢の形式による交易はこの正統四年正月以後もエセンによつてたえず行われている。いわばこれもオイラートの明國に對する經濟的要求の一つであつた。

もつともこのような朝貢貿易は單にオイラートにかぎらず當時においてもモンゴルをはじめ兀良哈三衛など明國との間に行われ、廣く一般的な交換經濟の様式であつてオイラートにとつてとくに重要であるといふわけではない。オイラートにとつてもまた明朝にとつてもより重要なのは、西域の隊商路を利用した商業者による明國との經濟的交渉である。この隊商貿易を荷つた者は回々人であつた。

明代の回々人の活動に關しては日知錄あるいは實錄にみえるが、それによれば元朝がほろんで間もない洪武年間、に蒙古人色目人は多く姓を漢姓に改めた。かれらは官に仕えれば顯要な地位にのぼり、民間にあつては富商大賈となつてゐる。^③元代回々人の商業活動の目覺しさからみれば、これらの富商大賈の中には色目人の中に回々人が多く含まれてゐたであらうことが推察される。一方正統のころになると、このような漢人化した回々人とは別にオイラート治下の回々人の商業活動が活潑になつてくる。ただしエセンの勢力がまだそれほど東方へ擴大されてゐないころ、すなわちエセンが初めてハミ征伐を行つたころには、回々商人の活動は主としてエセンの朝貢使

節と共にハミを経て甘肅方面から中國へ入つてきている。^④ところが正統七年ころには東モンゴリアがエセンの威力に壓迫されて三衛は一應オイラトに屈服し、オイラトの虎威をかつて女直征伐をしているほどで、少くとも東モンゴリアへの交通路は確保されてきた。この情勢にもとづいてオイラトの明國への朝貢使節が急激に増加してきた。すなわち從來はオイラトの使者の明に來朝するものは僅かに五人に満たなかつたものが、使臣だけでも千人にのぼり、この外交のために来る者が非常に多くなつた。そこで明朝では今後定數を定めて、それ以外は入關させず猫兒莊から歸えす様にする政策をとつた。^⑤このような事情はモンゴルに對する明朝の政策が受動的消極的になつたことをいみすると同時に、オイラトの勢力がしだいに東方にのび、交通路が確保された結果、大同方面から朝貢あるいは貿易をする傾向が生じ、しかもその人數が急激に増加して來たことを物語つてゐる。明朝側の制限にもかかわらず同じ正統七年の翌二月にはエセン使者の脫木思哈ら二千二百餘人が北京に赴む^⑥ている。この使節の來朝も大同からであるが、朝貢は大同方面が中心となりますます頻繁となつてゐる。さらに正統七年九月には、

“正副使定數を除くほかは、凡そ從人および貿易の人はことごとく留めて猫兒莊におらしめ、……從人および貿易の人はおのおの禮法にしたがつて……”^⑥

というありさまで、使者および商人が大同方面から多くくるようになったため明朝ではこれが對策に苦心していた。このように僅か二・三年の中に明國をしてその對策にかくも苦心せしめるほどかれらが増加したのは、元代の例を見るまでもなく、遊牧民族の性格が西方貿易ルートを通して隊商貿易に従事し、自身商業資本家となる^⑦か、あるいは回々人または一般西域人らの隊商貿易を保護することによつて利益をうることにあつたのである。同時に隊商々人たちにしてみれば、隊商路の治安を維持するためには、遊牧民族の間に強力な統一勢力が出現す

ることが望しいのである。エセンがまずアルタイ山附近の部族を平定し、隊商路上の重要地點であるハミ・赤斤蒙古・沙州方面を経略したところから、かれの軍事行動が意外に急速且つ容易に促進しえたのも、一つにはこれら回々人を主とする隊商々人の積極的協力があつたためではなからうか。ともあれエセンの勢力の擴大に相應じて回々商人の隊商的規模も大きくなり、遠くサマルカンド方面から往來する様になつた。また正統十三年十二月の禮部の上奏によれば、トトブハ及びエセンの使臣と共に回々商人阿里鎖魯檀ら計三、五九八名がやつて來ている。その内回々商人は八三〇名が來たと報告されてゐる。しかしこれは同じ十三年十二月壬申の來朝の記錄に阿里鎖魯檀等七四二とあり、報告より減少しているが後者が來朝の實數であらう。このように七百人不いし八百人くらいが隊商を編成して商業貿易にやつてきたことが知られる。こうして隊商路を通してエセン治下の回々人の商業上の經濟活動が年を追つて烈しくなつてきたのも、間接的ではあるが、オイラートの明國に對する經濟的要求の一つのあらわれとみられよう。

次に注意すべき事は朝貢貿易と隊商貿易のほかに、エセンの西方ハミ方面の經略をはじめとして、東モンゴルへの侵入、三衛の擊破、北朝鮮、滿洲への進出など絶えざる戰鬪の擴大に相應じて、中國から軍需品を輸入している事である。正統七年十月の巡撫大同宣府右僉都御史の羅享信の上奏によれば、

“この頃聞く所によれば、オイラートの貢使が北京へやつて來ると官吏や軍人などの中で無賴の者達が弓と馬とを交換し、それがややもすると千を以て數えられる。オイラートの貢使は弓を得ると、これをひそかに衣や篋の中へかくして國境を越えたのち、はじめて出すのである”

と當時武器の密賣買が行われた様子を述べ、これに續いて羅享信は自らの意見として、“北方人たちは常日頃この武器を利用するが、これは中國人が財物に貪慾である爲に行われる交易であつてよろしくない。そこでこの密

貿易取締の對策として、一方では弓を作つてこれを賣り馬を買う中國人を取りしまると共に、他方北方人の貢使たちを居庸關でとりしらべる勅を出してほしい”と上奏し、この結果、萬全・山西行都司に密貿易取締りの勅が下つてゐる。この勅に對して、更に都察院右都御史王文などのとりしらべ方法に對する上奏が出てゐる所からも弓などの武器がオイラートに流入しつゝある事がわかる。しかしこの時はまだそれ程多くなかつたと見えて、取締も嚴重ではなかつた。

八年九月の直隸州衛千戶陳鏞の言によれば、“北方の使者が北京に到る時にはその沿道の人々が、ひそかに軍器銅鐵を藏して賣買するが、これは許してならない”といふ状態であつて單に弓のみではなく、銅鐵製の軍器をも含んでいた様である。これに對しては禮部を通して禁令が出てゐる。

この様な傾向が更に強くなり、軍器類も具體的に明らかにになり、取締も嚴重になつたのは八年も末の十二月で、大同宣府獨石等處總兵官の永寧伯譚廣などに與えられた勅では、“オイラートの使臣たちは盔甲刀箭及び多くの違禁の鐵器を行李の中に持つてゐるが、これは大同宣府の貪慾の者たちが密貿易をするためである。これは長官などの號令が行きとどかないからで、かさねて禁令を出せ”とあり、また民間で鐵器をオイラートに賣る者は禁衣衛でとらえて監禁すべしという勅も出てゐる。もちろん鐵器と言つても一概に武器とは限らないので、その中には日常生活上必需品、とくに遊牧社會においては移動に際しても破損の少ない鐵製の鍋釜なども含まれてゐるであろう。古穢雜錄に、“この鐵鍋は廣東から萬餘里を経て北京に來たもので、一鍋は絹二疋で賣られるのに、北方の使臣たちは一疋にまけさせようとしたため、鍋を賣る者は門をしめて賣らなかつた”とあるように、鐵鍋の需要も多かつたであろうが、ここで禁令の對象となつた鐵器とは主として盔甲刀箭等の武器であり、この武器が輸出禁制品のために密貿易の形で賣買されたことを示してゐる。

さらに十年には、オイラートの使臣は大同宣府の貪利の徒からひそかに買つたものであるが、兵甲弓矢銅銃などの諸物を帯びる様になつた。ここで注意すべきことは、十年には銅銃が北方に入つている事である。明代も英宗頃に用いられた銃は金屬性有筒式であり、火薬は發射力として用いられるいわゆる近代式の銃であることは、すでに矢野仁、博士の指摘されているところである。^⑨この銃器に關しては、これより先、正統七年頃は北方遊牧民族は强悍であるが、ただ我が中國の火器をおそれているとある。明側の火器を中心とする兵器類が北方遊牧民族にまさり、かれらにとつては脅威の狀態にあつたのである。この火器が九年頃からしだいに量を増しつつ北方に持ち去られたのである。十一年になるとこの様な兵器をオイラートに賣るために、明側の官吏軍人や民間人たちがひそかに専門の技術家を通して軍器を作製し、オイラートの使者が歸える日にこつそり待ちうけて賣つてゐる。中國人側の兵器密造が大規模になると共に密貿易も盛んになつて來た。この傾向は實錄の示す所によれば、其の後もたえず盛んに行われ土木の變の直前すなわち十四年のはじめまで續いた。

この兵甲弓矢をはじめ銃等の銅製あるいは鐵製の金屬器類は、當時の北方遊牧民族の間においては生産の技術はもちろん生産能力の點で、はるかに中國に及ばなかつたと思われる。したがつてそれだけまた金屬製品に對する北方遊牧民族の要求も烈しかつたのである。なかでも銅銃などは元來明初中國に傳來し、永樂帝の南征の時にさらに改良が加えられて近代兵器化したばかりで、オイラートなどにとつては、いわば新兵器である。ことにエセンのようにたえず戰鬪を續けているものにとつて、この新兵器は明側に對する經濟的要求の最も重要なもの一つであつたに相違ないのである。

次に兵器類のほかに衣服糧食の類に關するオイラートの經濟的要求をあげなければならない。もちろんかれらは元來固有のものとして、衣服は牛羊馬などの毛皮類で作り、食糧も肉類や乳製品を主とするが、しかしかれら

のうちでも貴族・支配者階級はこのような衣服食糧では満足しない。やはり中國の絹織物や綿布あるいは米麥を欲求する。かれらの穀食の經驗は相當古い様であるが、正統六年十月の實錄にもオイラートの使者たちが大同を経て來朝し、米麥牛羊などの諸物を求めていることでも知られる。このようなことは、人間の食糧のみならずかれらが戰鬪に常に用いる馬駝の食糧に關しても、野生の草等に限らないようである。正統十年十月戶部の上奏によれば、トトブハの朝貢の使者および回々商人たちの使用して來た馬駝の糧に豆類のような濃厚飼料の使用が見えてゐる。戰鬪の行われる時、農耕民族に對する經濟的要求の中には以上のような糧食類も含まれている。

衣服類に關しても又實錄中にしばしば衣服とか帛・麻あるいは靴襪などが北方へ持つて行かれてゐる事が見える。とくに帛は朝貢貿易品として北方の馬などと交換が行われ、また隊商貿易においても大きな意味を持つものである。土木の變後の事であるが媾和使節として北方に行つた楊善とエセンの間答によると、『我が方の馬の價をけづり、しかも我が方によこす帛は剪裂して幅の足りないのがあるのは一體どうしたことか』とエセンがせめたのに對して楊善は『けづつたのではありません。太師の方の馬が年々増して代價が拂いきれませんが、おことわりするにも忍びません。そこで少しへらしたのです』と苦しい言いわけをしているが、衣服糧食をエセンは多く明側に依存していたのである。これを最も明瞭に物語っているのは實錄正統十二年十一月の記載で、モンゴル人の阿兒胎臺が歸順して來た時の言にエセンが南侵をはかつた事があり、それに對してトトブハが、これを止めて、我々の服用は多く明にあおいでいるから明朝を攻めるべきではないと止めている。この十二年の時の南侵の計畫は實行には移されなかつたが、十四年土木の變の直前の時の事は明史韃靼傳にもでており、エセンの南侵計畫にトトブハが反對した理由も服食類を明國にあおいでいることがあげられている。

このように正統九年頃から宣府大同方面に對して軍器衣食類の要求が次第に増したのであるが、このオイラー

トの明に對する經濟的要求が積極的となつた原因として、オイラートの東方すなわち三衛に對する經路があげられる。エセンは西方の征服にあたつては頃三衛に對しては平和的な通婚政策を取つていたが、西方の經營があら程度成功すると正統十年ごろから三衛を侵伐しはじめた。そして十一年には兀食哈を攻め、十二年には泰寧人類兩衛ばかりでなく福餘衛南部地域にも攻め入り、さらに十三年ごろには三衛の東隣女直方面にまで手をのびてきた。このようにエセンの軍事行動が東方へ擴大した事は明朝に對する經濟的要求を質的にも急激に増加させる原因となつたと思われる。とくに宣府大同方面は地理的に接近し古來交通上の要衝をしめていた事からもオイラートと明朝との交渉の中心となつたようである。

なおここでエセンの經濟的要求が急激に増加したことに對し回々商人の活躍があつた事をつけ加えておかねばならない。先に回々商人が隊商貿易に従事したことを述べたが回々人の活躍には二通りあつた。すなわち、その一つは純粹の隊商貿易に従事する商人であり、他はエセンの直接の部下となつて政治・軍事・外交方面、とくに對外經濟問題を擔當する官人としての回々人である。この點で明側の資料も明らかに區別している。すなわち商人の場合は貿易の人とか、回々賣買商人、あるいは賣買回々某などと書くが、同じ回々人でも使臣某が朝貢して何々を賜うと言ふ形式で書かれているのは官人としての回々人であらう。たとえばその一人、皮兒馬黑麻について見ると、正統八年九月都指揮平章として朵脫兒らと共に明國に來朝している。實錄によれば、かれらが數千里を遠しとせず苦勞を重ねつつ大同方面から來朝して來たとある。當時はエセンの勢力が、ほぼ内モンゴリアに行きわたりつつあつたが、しかもなお、その主勢力は依然としてオイラート本地にあつたので、それがため數千里を經過して來朝したのであらう。ところが十年九月には正使として來朝し、つづいて十年中には十一月、十二月に、十一年には正月に、十二年には十月十一月十二月に來朝してゐる。これらはいづれもエセンの十年ごろから

はじまつた東方三衛方面の遠征と密接な關係を有しており、ただ來朝の回數が増加したばかりでなく、北方地帯における戰鬪に不適當な冬期を利用して來朝し軍事上の經濟的要求を滿たすことにより、次の戰鬪への準備をなしたと解される。すなわち兵器糧食類の輸入とか、あるいは戰勝による戰利品と明側の物資との交換とかのためである。皮兒馬黑麻の來朝のうち、十年十二月の場合は馬八百匹、青鼠皮十三萬、銀鼠皮一萬六千貂鼠皮二百をもたらししたが、明朝ではその數が多量にすぎるので馬は良馬をえらび、青銀鼠皮は各一萬を、また貂鼠皮は全部を收め、殘餘はことごとく使臣をしてみづから賣らせた。この場合代りに何を持ち歸えつたかは不明であるが、注意すべきはとくに青鼠皮は官貿易一萬に對して實に十二萬が自由賣買されていることである。また十二年十一月の場合には、二千四百七十二人の多數で來朝し貢馬は實に四千一百七十二匹の多きを數えている。これは三衛に對する第二次の侵寇、すなわち十二年の遠征の結果、戰利品の馬を明側にもたらししたものと思われる。このような回々人の活躍は皮兒馬黑麻のほかにも、たとへば速來蠻、阿古蠻、哈三火、捨黑馬黑麻らがあり、いづれもエセンの東方への擴大とともに、その活躍が急激に盛んになつてきたことをもの語つてゐる。

- ① 瀧遼一『蒙古の音樂について』「蒙古學」第三冊
- ② 實錄正統十四年七月庚午。「北征事蹟」には「酒を奉りて彈唱す」とある。
- ③ 日知錄
- ④ 實錄正統六年五月戊戌
- ⑤ 實錄七年正月戊寅
- ⑥ 實錄七年九月乙丑
- ⑦ 飯塚浩二『遊牧民の制覇と隊商商業』「歴史學研究」一三二號
- ⑧ 實錄十三年十二月庚申及び壬申
- ⑨ 矢野仁一『支那に於ける近世火器の傳來に就いて』「近代支那の政治と文化」三二〇頁以下
- ⑩ 和田清『元良哈三衛に關する研究』

三 明朝とオイラートの外交政策と土木の變

以上でオイラート治下の回々人の活躍をも含めてエセンの明朝に對する經濟的要求が北方の情勢と關聯しつつ、朝貢貿易と隊商貿易と軍事上の經濟的要求から來る密貿易と三つの形で而も第一は永續的に第二は正統七年頃から、第三は九年頃からいづれも年を追うて激増してきたことを述べたが、これらの北方の經濟的要求に對して明朝はいかなる態度をとつたであらうか。

英宗のオイラートに對してとつた政策なり態度を考察する前に、一應明初からの對蒙古政策を省みる必要があらう。明初の政策は洪武・永樂二帝を中心とする武力的な經略によつて輝しい成果收めた。その結果は對蒙古境界線が長城をこえてほぼ今日の多倫・商都・武川・五原の一線にまで進出したのである。しかしこの時を以て限界點に達し、その後宣德五年六月ごろからは、まず開平衛を獨石に移したのを手はじめに、しだいに境界線を後退させた。これとともに、來歸者に對しては慣例を設けて例えばアロダイがオイラートに敗れて部曲が離散しその一部の把的らが明朝に來歸すると明朝では官職を與え鈔幣を賜り供具を給し以後來歸する者の慣例としてゐる現状維持の安定を求める政策をとつた。これは明初の積極政策から消極的、受動的な政策への轉換を意味し、北方地帯への政治的意欲の喪失を意味する。とはいへ成祖の樹立した境界線は蒙古内部においてモンゴルとオイラートとの勢力交替などがあつたにもかかわらず、その後正統まで、だいたい維持されてきた。そして英宗即位の當時も祖宗の立てた輝かしい功績とその遺産を受け繼いで北方に對して政治的經濟的優越性を誇示しつつ自己の體面を保持していた。しかしこのような明朝の蒙古族に對する優越性を誇示しようとする思想と、オイラートの中國に對する經濟的要求とが現實において大きな矛盾を生じてきたのが、英宗の時であつたのである。すなわち、

すでに述べたように明朝はこのときオイラートに對して現状維持の安定を求め、積極的打開策をとらずオイラートの經濟的要求には制限をもつて臨む方針を取つた。その具體的な政策としては、まづ朝貢貿易に關して、朝貢の人數及び回數の増加に對して明國の邊境附近にあつては饗應の加重を訴え、中央にあつてはオイラートの貪利に辟易するといふ理由で朝貢の人數を制限し、あるいは鐵牌を與へ、面倒な禮法を設けたりして官貿易の制限を強化した。隊商貿易に關してもほぼ同様な態度で制限を行つた。またオイラートの軍事經濟上で必要とした密貿易に對しても度々禁令を發して中國商人とともにオイラートの密貿易者の取締を行つてゐる。

この明朝の貿易制限に對してオイラートは、官貿易と並行しつつ小規模の掠奪侵入を企ててゐる。これらの不法行動はオイラートの經濟的要求解決の一方法として用いられたものであらうが、このため明朝では邊境地方の軍備を擴大充實し、また燒草等の防禦策につとめてゐる。しかし、このころオイラートとしては北方地帯において絶えず戰鬪を行つていたので明朝に對し大規模な武力侵入を行うことをさけ、むしろ平和的解決に努めてゐる。もつともエセンの明に對する侵寇計畫は、正統十四年の土木の變以前からあつた様で、實錄の傳える所でも九年、十二年に記されているが、實現しなかつた。むしろ逆にエセンとしては自分の子供と明の帝室との間に婚姻關係を結ぶように、ひそかに計畫してゐる。このことは否泰錄をはじめ皇明北虜考・殊域周咨錄・四夷考・名山藏・明史記事本末などにみえてゐる。土木の變後の景泰元年（一四五〇）七月十四日の伯顔帖木兒が「エセンの幼子を指して、これが明朝と婚姻關係を結ばんとした者である」と述べてゐることによつても知られる。このようにエセンが明朝に對して平和的な婚姻政策によつて政治的・經濟的要求の解決をはからうとしたのは、やはり北方自體の内部的情勢によるものであらう、北方自體の政治的情勢とは、オイラートのエセンとモンゴルのトブハとの關係が衝突の危險にさらされはじめたからである。しかも對明關係において通ずるものがあつた。十

四年正月のトトブハに與えられた英宗の國書などによつて知られることは、トトブハが明朝に對しては頗る忝謙であつて、單に明朝と平和外交を望むにとどまらないで、進んで明朝と妥協し、明朝の助をえてエセンに對抗しようとした形勢が見られる。このことは北方地帯自體の内部の對立の烈しさが、政治的にも經濟的にもたがい明國に依存せねばならない形勢をうみだしたのである。いわばエセンとトトブハは對明關係とくにその經濟的交渉の成敗いかんによつて北方地帯における優越をある程度左右することが出来る状態にあつたともいえる。しかるにむしろトトブハの方がエセンより對明交渉において平和的に圓滑にいつていた。そこでエセンはその經濟的な目的を達するために、あまり好まない最後の非常手段に訴えて正統十四年七月明國に武力侵入を行つたのであると解される。以上で土木の變の原因の一端を述べたが、次に變後の經過をつけ加えよう。

實錄十四年八月癸亥の記載によれば、エセンは九龍蟒龍衣段疋、および眞珠六把、金二百兩、銀四百兩をえており、戊辰には五千兩をエセン個人がえ、そのほか、伯顏帖木兒などに賜つた額を合計すれば二万二千兩をえてゐる。明史瓦剌傳では單に白金三万と記しているが、數度にわたり金銀そのほかいわゆる朝貢貿易品に屬する莫大な物品が事變によつてエセンに送られている。これは捕虜になつた英宗の身代金として公に送られたものであるが、このほかに實錄十四年九月には巡撫山西右副都御朱鑑の言として「エセンは種々の手段を用いて盔甲、器械、金銀、段錦、牛羊驃馬などの物十万ばかりを持ちさつた」とあるように兵器などの密貿易品も獲得したのである。古穢雜錄では、それについて「衣甲兵器をオイラト人が滿載して持ち歸つたが昔から胡人で中國の利を得ること、この舉より盛んなことはまだないであらう。胡人もまたみづから望外のことであると言つてゐる」と、土木の變の性格の一端が經濟的要求にあるということを知りうるとともに、この事變がオイラトにとつて豫期以上の成功を収めたことが理解されよう。さらに北使錄によれば、獨石衛をエセンの人馬が車で糧食を運搬

しているのをみて感じるところあり、詩を賦すと前書きし、邊境はオイラートの侵入にあつて、慘害を受けたが倉廩はなお存してオイラートの糧食を助けると述べている。實錄景泰元年二月の參贊軍務右副都御史羅通の奏の、「近頃北方人が侵入して來て、わが食糧を食う」ということからみれば、明朝の邊境守備軍の常食を食としたことが知られよう。このほか、エセンは寧夏をはじめ處々にたびたび小規模の掠奪侵入を試みており、また土木の變以前においても平和的交易と並行してしばしば掠奪侵入を行つてゐる。これらの小規模な、いわゆる掠奪侵入は兵器糧食衣服などが平和的形態での交換經濟の方法では必要量の限界を満しえないために、その不足を補う目的の行動であることがうかがえる。したがつてその要求が満され、その目的が達成されると、中國には長く留ることを必要としないのである。土木の變も實は本質的な性格においては、このような小規模の侵入と同じものように思われる。ただ北方地帯の情勢がこの要求を非常に大がかりなものとしたため、掠奪も大規模であつたのである。しかし結果的には、むしろ望外の收獲を得たのであつて、その目的は英宗を捕虜にすることでもなければ、もちろん中國を領有支配することでもなかつたであらう。エセンは中國侵入を短時日で一應ひきあげ北方の情勢にそなえたのである。しかしこの侵入に思わぬ大收獲をあげたエセンは景泰三年にはトトブハとの戦にも成功したのである。

またエセンと英宗の關係については、事變を境として戰勝者對戰敗者の立場がとられるべきであるのに依然臣君の間柄がつづき、エセンは英宗のとりあつかいにはむしろ窮したかたちであつた。このことは實錄中にもたびたびみえるが、明書楊善傳の一事をあげれば充分であらう。すなわち官童が事變前の關係をとりあげてエセンに臣下の禮をとることを諭すと、エセンは英宗を賓主として遇した。のみならず妹を英宗の配偶者としてたいがと官童に相談し、自らの誠意を示したのに對し、英宗が従わないと、かえつて敬服しているほどである。

また北使録に收めてある李實の上奏に、李實が北方オイラートの勢力内に入ると、オイラート人は皆喜び道にむかえ歌をうたい、あるいは乳酪をすすめるなど、かれらは皆和好を願つてゐる、と述べてゐる。このように土木の變の後も、エセンをはじめオイラート側はいずれも平和的交渉を希望していたことがわかる。

① 明實錄 正統七年正月戊寅
 〃 七年十一月十二月など

③ 否泰錄
 ④ 明實錄 十四年正月己酉

む す び

わたくしは本篇において、北方オイラートの情勢に中心をおきつつ土木の變を考察してみた。これまで一般に土木の變の原因としては、オイラートの貪欲性から生じたものとか、エセンが婚姻政策に失敗したことに端を發したものとかいわれている。これは確にその一端ではあるうが、それだけではない。

オイラートが明國に對してのぞんだものは朝貢貿易であり隊商貿易、密貿易であつた。これは北方地帯の内部情勢の變化に深い關聯がある。このようにオイラート側の平和的交渉によつて、その經濟的要求を満了としたことに對し明朝の對北族政策は矛盾するものであつた。この矛盾がしだいに烈くなつて遂に破綻にまで導いたと解すべきではないであらうか。

北方遊牧民族の中國への掠奪侵入は、その規模の大小を問はず單なる貪欲好戰とのみみるのは誤りである。それらの背後には常に切實な經濟的な要求が含まれてゐる。しかしそれは平和的な交換經濟の様式で解決出来る場合もあれば、一方的な要求の場合にはいわゆる武力侵入も生ずるのである。

ON THE WAR OF T'U-MU (土木)

Junpei Hagiwara

The War of T'u-mu which took place in July, 1449, was one of the most remarkable events in the history of relations between China under the Ming (明) dynasty and Mongolia. An analysis of this event reveals that there was a much complicated situation caused by conflicts between the Mongoles and the Oirats. Relations between the Ming dynasty and the various northern tribes seem to have been influenced, directly or indirectly, by the much complicated situation within the northern tribes themselves. Hence such extraordinary relations, political, military and especially economic, between the Ming and the northern tribes. The author thinks that trade between them took three forms, i. e., tribute, caravan trade and contraband. The northern tribes were rather anxious to keep peaceful relations with the Ming, while the Ming restricted its trade with the northern tribes in contradiction to the latter's request for promoting economic relations. And this discrepancy in policy between the two precipitated the War of T'u-mu. The author concludes that it was not mere avarice and bellicosity on the part of the northern tribes but their economic necessity that led them to war.